

Title	L. A. ムラトーリとパラティーナ協会 : R. I. S. 刊行の財政・文化的基盤
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学論集. 2 p.179-p.206
Issue Date	1990-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79485
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

L. A. ムラトーリとパラティーナ協会

— R. I. S. 刊行の財政・文化的基盤 —

米 山 喜 晟

L. A. Muratori e La Società Palatina

Yoshiaki Yoneyama

Sommario

Premessa Che cosa è R. I. S. ?

Cap. I Il motivo concreto della pubblicazione di R.I.S.L'influenza di A. Zeno e Leibniz. L'importanza di F.Argelati.

Cap. II L'allargamento del piano.

Cap. III La costituzione della Società Palatina. La causa diretta della costituzione.

I carichi divisi fra i membri. La coscienza dei nobili.

Cap. IV Discordie sulla pubblicazione. Tra Argelati e Sassi. Tra M. e Sassi. Consigli intelligenti dei membri della Società.

Cap. Ultimo Da R.I.S. ad A.I.M.A.

はじめに

R. I. S. とは L. A. ムラトーリ (以下 M. と略す) が 1723 年から 1751 年にかけて刊行した *Rerum Italicarum Scriptores* の略名で、時には RR. II. SS. と記されることもある。直訳すると「イタリアの事蹟に関する著者たち」程度の意味で、『イタリア史資料集成』、あるいはより具体的に『イタリア歴史、年代記、伝記、資料叢書』とでも呼ぶべきであろうか、全 28 巻より成る膨大な叢書である。全 28 巻位で「膨大な」などと評すると大げさだと評する人がいるかも知れないが、一般的に言って各ページが二段組で、各段がそれぞれ約 75 行×42〜3 活字から成り、また多少例外はあるが各巻が 600 ページを優に越す二つ折判の大部の書物であることを考慮すれば、「膨大な」

という形容が決して誇張ではないことを了解していただける筈である。十八世紀の後半以来、ブルクハルトの『イタリア文芸復興期の文化』に代表されるイタリアおよびルネサンス関係の名著が数多く生れているのであるが、おそらくそれらはすべて、何らかの形でこの膨大な資料集から恩恵を蒙っている筈であり、ブルクハルトらによって構築されたルネサンスという概念自体、この資料集を一つの基盤としていると言っても決して過言ではあるまい。

1900年以来、この叢書は Carducci を代表とする、当代一流の文献学者たちの集団によって、改訂がすすめられ、今日では旧版よりもむしろ改訂版が主に用いられているという事実も、M. がこの叢書を刊行したことの意義を高めこそすれ、貶めはしないはずである。また現代イタリアの代表的な歴史学学術雑誌の一つは、*Bullettino dell' Istituto Storico Italiano per il Medio Evo e Archivio Muratoriano*⁽¹⁾ と題されており、そのタイトル通り、この叢書に収録された文献について論じた論文がしばしば収録されている。たとえば M. がこの叢書の中に採用したマリスピーニの『フィレンツェ史』をめぐる、近年 Davis らそれを後年の偽作とする説（前世紀の Scheffer-Boichorst の主張を再び採り上げた説）のグループと、Morgnen, De Matteis ら真作と見なすグループとの間で激しい論争⁽²⁾ が展開されている事実から考えても、このタイトルが単なる飾りではないことが分る筈である。

ところで、このような大規模な出版活動が、ヨーロッパで戦争が絶えなかったこの時代に立派に完成されたという事実は、真に驚くべき事柄のように思われる。一体それがどのように進められたかを知ることは、M. の学問研究史を遡る上で不可欠であると共に、この時代の文化についてその様態を具体的に知る上でも有益であると思われる。そこで本研究ノートでは、関係資料を利用することによって、その過程を再現することにしたい。

これまでの同様の試みと同じく、本論でも M. の甥 Soli の伝記から、あらかじめその経緯を大まかに把握して見ることにしよう。

「(筆者注、Soli はまず伯父の関心が古代から中世に移ったことと、中世研究の方が古代研究よりも稔りが大きいことを記し、以下はその部分に続く) そこで伯父は、その思考をこの種の学問(erudizione)に向けた。そして学問愛好者を助けるために、二つの道を採用した。その一つは野蛮な時代(Secoli Barbarici)のあらゆる事件の全集、つまりその時代の知識の主要な倉庫(il fondaco principale dell' Erudizione di que' tempi)を形成するために、500年から1500年までのイタリアのすべての歴史を蒐集することであった。たしかに彼は「良識」に関する彼の論文の第二部を完成しつつあった時、文学者の内の誰かがそうした気高い試みに着手してくれることを願っていた。だがその当時伯父は、自分がそれを実行しなければならない立場に立とうなどとは夢にも思っていなかったのだ。とりわけ高名な Apostolo Zeno がそうした立派な企画を有していたからである。しかしその後この人物は、皇帝の宮廷に仕えるため(ウィーンへ)去った。そこで伯父はこのような偉大な企画を継承できるような人物や、あるいはそうしたことを考えることができる人間でさえ他にはいないとあきらめ、自分でその役目を引受けようと決意した。そこ

で彼は、すでに出版されているイタリア史を蒐集するだけではなくて、未刊の作品をも求めて、様々な図書館を探り、主にアンブロジアーナ図書館とエステ家図書館、さらに個人の蔵書からそれらを発掘しようと試みた。こうした手稿の搜索のために、どんなに労力や苦心を要したかを、十分に説明することはとてもできない。何故ならイタリアの君主たちは、また共和国となるとそれ以上だが、何らかの彼らにとって有害な情報が拡がることを大いに心配し怖れていたからで、また個人の場合でも、もし彼らが所蔵する手稿を筆写して出版する許可を与えたりすれば、秘蔵の宝物を失うことになると考えたからである。しかし伯父は大いに奔走し、その結果として恐らくこれまでに出版されたものの総量を上回ると思われるほど大量の年代記や歴史書の写しを発掘することに成功した。そのおかげで伯父は二つの恩恵とサービスとを公共にもたらした。すなわち、闇の中から発掘された年代記類は、他の多くの手稿を襲ったあの湮滅という運命を免れることができたし、同時に「中間の」と形容される時代、つまり最近数世紀とローマ時代との間にまたがる時代について、我々に不足していた情報を学ぶためのより巾広い足場を、イタリア史の愛好者の前に開いてくれたからである。さらに伯父は、入手しうる限りの手稿と照合することによって、すでに刊行されていた歴史書を改善しようと試みた。それに加えて伯父は適切な序文をそれらの歴史文献の各々に付け、またその内のいくつかには、簡潔な注も付した。こんなに大量のイタリアの年代記を印刷するための場所は、イタリアでは見当たらなかったし、またそれらを印刷、出版するために必要な膨大な経費を引受けてくれるような人物を見つけることも、伯父にとってはそれに劣らず困難だった。だが程無くして、それらの障害は一掃された。というのは、皇帝Carlo VI世陛下によって、この出版事業がその庇護下におかれた上に、ミラノの公館(Palazzo Ducale)に、印刷を行うための場所が与えられたからである。さらにパラティーナ協会の人々(i Soci Palatini)が現われた。それはかのミラノの地で、各自のすぐれた学才に基づいてこの印刷事業を負担した貴族たちの名前で、彼らの尽力によって、アルプス以北の最良の印刷に対しても決して羨望を抱かなくても済むほど素晴らしい、美しくかつ正確な印刷に仕上げられたのであった。この偉大な資料集の第一巻が、*Rerum Italicarum Scriptores* というタイトルで陽の目を見たのは1723年のことで、その後1738年までの間、二つ折判の27巻が引き続き刊行され、さらにもう一巻が、様々の年代記や未刊の資料類に索引の一部を加えて、1751年に追加出版された。今後全作品の総索引を収録した別巻の刊行が期待されている。

この叢書の全巻はイタリア内外で売行きが良く、その結果高名なサン・マウロ(サン・モール)のベネディクト派修道士が *Scrittori Rerum Francicarum* (ママ) を企画し刊行するための刺激としても役立った。』⁽³⁾

以上が甥 Soli による R. I. S. 刊行の簡単な経緯である。この説明で特長的なのは、Apostolo Zenoと皇帝Carlo VI世を除くと、固有名詞が全く出てこないということで、これを読む限り、たしかに M. は資料集めの段階でこそ大いに苦勞したが、印刷の段階では、皇帝の庇護とパラティーナ協会の協力を得て、案外簡単に事業を完成したという印象をうけるかも知れない。だが印刷の

ために協力したパラティーナ協会とは一体どのような組織で、どのような人々から成立っていたのか。また個性の強いイタリア人たちが、そのように無私な協力態勢を組めたのだろうか、等々といった疑問が当然生ずる筈である。幸い前世紀の末頃、Luigi Vischi⁽⁴⁾ がそうした事情についてくわしく調べているので、主にその研究を基にして事情を明らかにしたい。だがその前に、R. I. S. 刊行の動機をさらに具体的に眺めよう。

第一章 R. I. S. 刊行の具体的動機

すでに我々は、R. I. S. 刊行の構想が M. 自身の発案ではなくて、A. Zeno から M. が引き継いだものと甥 Soli が記しているのを見たが、そのあたりの事情をさらにくわしく眺めると、M. がまだミラノのアンブロジーアーナ図書館の司書だったころ（1699年5月30日）、Zeno が M. に対して、「未だ刊行されていないイタリアの出来事に関する」⁽¹⁾ 資料で入手可能な作品を刊行したいと考えて準備しているので、協力を求めたいという趣旨の手紙を送っているという事実⁽²⁾ にぶつかる。さらに Zeno は同じ手紙の中で、構想中の叢書の名前まですでに考えていることを M. に打明けていて、それには“*Rerum Italicarum scriptores hactenus desiderati*（今日まで待望されているイタリア史資料集）”という、後年の R. I. S. に酷似したタイトルがつけられているという事実⁽³⁾ から、M. が Zeno から構想のみならず標題の一部まで引き継いだと見なすことも可能かも知れない。M. は Zeno の要望にたいして、ある写本の提供は行ったものの、求めた図書館所蔵の草稿の転写は断っている⁽⁴⁾ のだが、Zeno がすでに公刊用に蒐集したとして15作品のリストを示していること⁽⁵⁾ と、彼がヴェネツィア出版界に強い影響力を有していたことから考えると、この構想は決して単なる思いつきのごときものではなかったと考えるべきだろう。

だがヴェネツィア貴族の名門に生れ、詩作やメロドラマの改良によって名声を博すと共に、『イタリア文学者雑誌（*Giornale dei letterati d'Italia*）』の最初の31巻（1710-18）の刊行も手がけるという多彩な活躍を続けていた Zeno⁽⁶⁾ には、R. I. S. の夢を実現するための時間的余裕がなく、特に1718年神聖ローマ帝国皇帝の宮廷詩人に選ばれてその7月にウィーンに移住したことで、その構想の実行は不可能となった。

他方 M. はコマッキオ論争を契機にイタリア中世史への関心を深め、特にエステ家の起源を明らかにする必要から、イタリア中北部を旅行した古文獻の蒐集に努めていた⁽⁷⁾。Vischi は (1) すでに1714年暮と翌年1月に U. Benvoglienti にあてた手紙⁽⁸⁾ で、M. が Zeno は多忙の上病氣のため R. I. S. 構想の実行を期待しえないと見なしていること、つまり M. 自身が肩代りする必要があると考えるに至ったことや、(2) M. 自身が文献を蒐集したことに加えて、(3) M. 自身の健康と精神状態が悪化し、「視力減退と精神の過度の集中」⁽⁹⁾ のために、特に頭痛がひどくなり、深い学問や執筆活動が困難になったことが、M. を R. I. S. 刊行に向わせ、ことに1718年の Zeno のウィーン移住がそれを決定的なものとしたと推定している。

思えばこの事業に関する M. と Zeno との関係はやや微妙である。しかし学問共和国の構想で Bianchini を怒らせたり、『完全な詩』においてフランス人論客に論争を挑んだり、コマッキオ論争で Fontanini のみならず法王庁を論敵に回した上、エステ家史研究の際に Leibniz に対してすら激しい抗議を行った M. が、この事業に関してはそれまでの性急さを示さず、はるかに忍耐強く慎重な対応を重ねており、Zeno との関係にもそうした慎重な態度を認めることができそうである。

Vischi や、その研究成果をそっくり踏襲したらしい Carducci⁽¹⁰⁾ は、M. が R. I. S. 計画の前身に当り、その母胎となったエステ家史に関する資料集の刊行に取り組み始めた年を、1719年だとしているが、Andreoli はその時期が実はそれより一年遅い1720年3月～5月だと指摘している。⁽¹¹⁾ 今日残された書簡から見て、勿論 Andreoli の指摘の方が正しい。だから M. は Zeno がウィーンに去ったからといって直ちに R. I. S. 刊行に乗り出したわけではなかった。しかし M. に元来そうした夢がなかったというわけではないことは、先に見た1714～15年の書簡のみならず、早くも1711年6月にウィーンの A. Rambaldo di Collalto あての手紙にも似たような企画の構想が記されている⁽¹²⁾ 点から見ても明らかである。しかし結局そうした夢を実現しうるかどうかは、あくまで運命の問題のようである。そのような運をもたらしたのは、ボローニャの無名の書籍商兼出版業者 Filippo Argelati との出会いであった。

この F. Argelati⁽¹³⁾ とは、1685年12月ボローニャに生れ (M. よりも13才年少) た人で、イエズス教団の学校に学び、学士号を得たとする記録もあるが疑わしいようである。早くから書籍商を始め、1705年より一時的にフィレンツェに移住して、当時の知識人と交際して教養を深め、ボローニャに帰郷した後、叔(伯?) 父の一人の遺産を資金として出版事業に着手したとされている。当初ボローニャ大学の教授陣や名士らの協力を得て科学書の刊行をすすめたが、結局一度は破産し、必ずしも合法的とはいえない手段(くわしい記述なし)で立直り、1715年に出版活動を再開し、ボローニャ市民の詩集等を刊行している。ようやく1720年モデナで始めて M. の面識を得た。この時期 M. がそれまでに蒐集したエステ家史の資料集を刊行する計画を打明けた所、Argelati は大いに乗気になって、その実現に奔走し始める。

ところで C. Vianello らは、先に見た通り Argelati と M. とが個人的に知り合った時期を1720年のこととし⁽¹⁴⁾、それが定説となっているが、Argelati から M. あての書簡集に収められた755通の内最古のものは1703年11月22日付で⁽¹⁵⁾、当時18才の Argelati から M. あてに送られた、天文学や占星術の書物のリストを含む手紙である。その文面や59点に及ぶ書物のリストから考えて、明らかに古書の売こみ用の手紙で、以後17年間にわたり M. の許に送られた17通の手紙は、ほぼ書籍売込みのための案内状と見なして差支えなさそうである。

ところが1720年以後は事情が一変し、特に書簡 N. 19 (1720, 4, 9) では、M. が企画中のエステ家史資料集の個々の作品のタイトルを問い合わせなど、はっきりと M. の出版計画について触れており⁽¹⁶⁾、以後その書簡の多くは、R. I. S. 刊行の経緯を知るための貴重な資料となって

いる。他方、M. から Argelati にあてた手紙は、奇妙なことに M. の『書簡集』にわずか3通、それも1736年5月17日、38年10月10日、43年3月27日⁽¹⁷⁾と、いずれも R. I. S. 刊行がほとんど実現した後の日付のものしか残っておらず、他は Argelati の書簡から見て存在しなかったはずはないのだが、公刊されておらず、Vischi や Andreoli らが引用していない点から考えて、破棄されたものと見なせそうである。やはり内容が余りにも生々し過ぎたのではないだろうか。

このように多少曖昧な点はあるが、とに角 Argelati はモデナで M. に会い、その口からエステ家史資料集の刊行計画を打明けられて大いに乗り気になり、続いて行ったミラノ旅行の際に、アンブロジーアーナ図書館の司書 G. A. Sassi らに会って M. の計画を宣伝して協力をすすめたらしい。Argelati はさらに同書の実現の手がかりを求めてトリノに向うが、残された Sassi は Argelati のことばに大いに心を動かされて、M. あてに熱心に協力を申し出ている⁽¹⁸⁾。その申し出に対する M. の返事(1720. 5. 23)には、次のような一文が見られる。「貴下のかの友人の許でオランダのために私が求めた手稿は、実際かの地の本屋のために私が求めたものです。しかしそれと共に、実は私はかなり豊富にイタリアの未刊の歴史(文献)を集めておりまして、それを公刊しようと強く望んでおります。私はそれを他の刊行済みの古い作品と共にあわせて出版したいのですが、それらは私がその計画を打明けた自慢家で大口叩きの人物(vantatore et uomo di gran bocca) Argelati がご当地で触れ回ったように二つ折本6巻ではなく、4巻に収められる予定です。それらの書物はもっぱら300年から1500年という古い時代のみに関するものではありませんが、イタリアの古い著者たちのかかなりの部分をまとめた形になるでしょう。」⁽¹⁹⁾この手紙は、M. の企画がこのころどの程度まで発展していたかを示すと共に、そのArgelati観を率直に吐露している点で貴重である。

Andreoliはその短い論文の中で⁽²⁰⁾、1720年2月に『エステ家史論考(Antichità Estensi e Italiane)』の第二巻の執筆に着手した M. が同年5月にはそれを中断して R. I. S. の計画に没頭している理由を、1720年2月28日付オランダの Leida 発の、出版業者 Peter Van der Aa からのイタリア史関係の資料を刊行したいという申し出に基づくものと⁽²¹⁾と推理している。最終的にはオランダから出版されることはなかったが、こうした具体的な注文(Peter は四つの作品名を列挙している)を受けたために M. の漠然とした年来の夢が俄然現実味を帯び、たまたま同時期にミラノ旅行を控えた Argelati と会談したことが、M. の計画をミラノやトリノの知識人に伝えることになり、やがてミラノの知識人を動かして、R. I. S. 刊行の支援団体を結成させることになったというのが、大体の経緯らしい。

なお R. I. S. の母胎となった M. の四巻本資料集の構想を考える時、もう一つの無視できないのは、Leibniz の影響である。彼は M. と文通している最中に、全三部のブルンズヴィック家に関する堂々たる資料集 *Scriptores Rerum Brunsvicensium*⁽²²⁾ (別名 *Scriptorum Brunsvicensia illusrantium*) (1707-1711) を完成している。M. はその第三部にエステ家がロンゴバルド族起源の Obertenghi 家由来であることを証明したラテン語の書簡を掲載してほしいと、Leibniz に

依頼し、肝腎の第一論文は断られ、Alberto Asso 二世の子孫たちを扱った第二論文のみが掲載されたために、M. は Leibniz が自分の業績を盗もうとしているのではないかと勘ぐって争いが生じたのである⁽²³⁾ が、M. のそうした要求自体、彼がいかにその資料集の第一～二部を高く評価していたかを証言しているといえるであろう。英国ハノーヴァー王朝の実家であるドイツのブルンズヴィック公家に関する全資料を網羅しようとする壮大な野心に基づいて編纂された三部の書物（その各部は、R. I. S. の各一卷よりもさらに大部である）は、若き M. を大いに刺激したはずで、M. 自身紛争が終った後の1716年5月22日付の Leibniz あての手紙で、『エステ家史論考』第一部の刊行予定を伝えた後、第二部で古い時代の政治や習俗について論じたいとし、さらに「もし私が便宜や寿命に恵まれました折には、第三部を加えたいと考えておりますが、そこにはイタリアの様々の未刊の年代記が含まれるでしょう」⁽²⁴⁾ として、まさに類似の資料集の構想を記しているのである。だから Càmpori が、同じ部分に対して「M. の二大業績 R. I. S. と *Antiquitates Italicae*（『イタリア中世史論文集』）とが当初は『エステ家史論考』の附録として構想されているのを見るのは興味深い（*è curioso*）」⁽²⁵⁾ と注をつけているほどである。

このように考える時、R. I. S. の企画は決して単なる Zeno のアイディアの踏襲ではなくて、M. 自体の内部で育った企画の延長上にあり、それが次第に成長して Zeno の企画の内実を完全に充たすに至った結果であることが了解できるのではないだろうか。

第二章 構想の拡大と現実化

こうして当初4巻で刊行を予定されたはずのイタリア史に関する資料集が、全28巻の大著へと発展して行ったわけだが、やはり4巻と28巻とでは編集方針に根本的な差があったはずで、何らかの時点で方針の変更が生じたに違いない。その時期は何時ごろと見るべきであろうか。この問題を考える前に、無視しえないと思われる条件は、Argelati 自身が内心この事業の可能性に賭けていて、常に拡大志向を有していたらしいということである。それはミラノで M. の計画を Sassi に伝えた際に、全4巻の計画を全6巻として伝えたことから推察できよう。しかし Argelati がそうした志向を抱いた背後には M. 自身の説明の仕方にも原因がなかったとは言えない。すでに早くも1711年に M. がそうした夢を記している以上、M. 自身も Argelati の熱意を利用して、彼の旅行先であるミラノやトリノでのこうした計画への反応を探ろうとした可能性は十分に考えられる。ところが Argelati 自身が伝えた後に、Sassi らその計画を伝え聞いた人々が自ら表明した反響が予想以上に良かったことが、M. 自身に拡大の決意を固めさせたと考えて差支えないであろう。

1720年6月6日付でシエナの U. Benvoglianti あてに書かれた M. の手紙には、主にロンバルディーア地方の「1500年以前に書かれた未刊の歴史の優れた文献集（buona raccolta di storie inedite lavorate prima del 1500）」⁽¹⁾」を出版するつもりだが、その末尾にトスカーナの作品を加えたい

ので、自分に教えてほしいという依頼が行われており、拡大の意思が表明されている点で注目される。同月の末に Sassi からの協力の申し出を有難く受け入れているのも、そうした流れに沿った動きである。しかし同年10月28日に Zeno にあてた以下のような依頼状こそ、M. によるこの計画の正式の声明だと見なしうるのではないだろうか。

「この機会に私は自分の学問上の計画をあなたに打明けたいと思います。私は1500年以前の我々イタリア人の歴史文献をできるだけ集めてまいりました。そしてもしも神が私に寿命をお与え下さいますならば、《イタリアの事蹟に関する》著者たちの作品をまとめたいと考えております。先日 Maffei 侯が、あなたはその秀れたご配慮によって、私が所持していないいくつかの作品をお教え下さることができるし、またそうしたご高配をたまわろうと私に申されました。私はあなたがすでに同種の刊行物についての御計画を断念しておられるのではないかと想像いたしております、ここにご配慮をお願い申し上げる次第であります。もしご協力をたまわることができますれば、心より感謝いたします。遠国にご滞在とはいえ、民衆はあなたからそのご英知の果実を期待しておりますことを、何卒お忘れにならないで下さい。」⁽²⁾

単に自分の願望を伝えて了解を求めているだけではなくて、同時に協力までを要請しているため厚顔という印象は否めないかも知れないが、客観的に考えてみると、やはり M. の方がこの企画にとって適任者だったことは明らかであり、そうした場合に尻ごみするような M. ではなかったのだ。だがこの書き方は仲々興味深い。彼は何らやましき等の感情を混えずに、極めて淡々とした形でしかも（これは偽りだが）何ら具体性のない遠い希望として、計画に対する自分の心境を伝えている。残念ながらそれに対する Zeno の返事を私は入手し損ねたのだが、11月27日付の M. あての返事には、この計画について、Zeno が「ご承知の通り、私もまたかつて育て… 完全には放棄していない考え」⁽³⁾ と記しているということで、どうやら M. が具体的な計画を有していることに勘付いているようだが、今さら差し止めるわけにもいかず、暗黙の了解を与えたようである。おそらくその返事に対して書かれたと思われる M. の翌1721年1月2日付の Zeno あての手紙は、当時の M. の心境を示しているようで仲々興味深い。それは次のような文章で始まっている。「あなたのいとも懐しいお手紙、つまりあなたのご健康についてとあなたが今占めておられるご身分に関するお知らせを読んだ際に私が得た安堵の気持ちは、格別のものでした。また私は、あなたのご功績をこれ以上曇らせることなく、かくも輝かしい地位と国家とにあなたを運び給うた神の摂理に対して感謝しています。」⁽⁴⁾ このように M. は Zeno のウィーン宮廷詩人という地位に最大限の讃辞を捧げ、さらに「特に私の心を打ったのは、ご当地の比類なき君主があなたに与え給い、お許しになったこの上なき仁慈と寛大の行為を知ったことです」⁽⁵⁾ として、Zeno を召し抱えている皇帝 Carlo VI 世を讃美している。M. は続いてコマッキオ論争に関する近況 (Fontanini の著書が刊行されそれに反論する論文を書いたこと等) やベスト流行のニュースを記し、R. I. S. については、「私が考えております叢書につきましては (della raccolta), 次回に記しましょう」⁽⁶⁾ とただ一行しか触れていない。実際にはこの時期の M. は Fontanini の

最後の論文に対する反論を前年の内に早々と刊行しておえて、⁽⁷⁾ R. I. S. の発行に備えて奮闘中だったと思われるが、M. はむしろ前年の末に発表したフォンタニーニへの反論の著書を送る際に添えた手紙としてこうした文章を書き連ねたのである。M. が予告した次回の手紙が書かれたのは、それから約4ヶ月後(5. 14)のことで、そこでは「私は500年から1500年までの《イタリアの出来事に関する著者たち(Scriptores Rerum Italicarum)》を一まとめにして刊行しようという私の計画のために働いております。私は既刊のものを再版しそれに未刊のものを付け加えたいと思います」⁽⁸⁾と記して、具体的に計画が進行中であることを告げる。さらに、「それはイタリアに欠けているもので、花を添えるものとなるでしょう。当然のことではありますが、そのために私は皇帝陛下と法王聖下のご保護を熱望しております、あらゆる優れた企画に対して良識をお示しになる君主からのそれを希望しております。かくて大よその所をお伝えいたしますと、私は未刊の歴史書をパドヴァに関して4乃至5点、ヴェネツィア2点、ブレッシェ1点、フェルラーラ4点、ボローニャ2点、モデナ1点、レッジョ2点、パルマ1点、クレモナ1点、ミラノ3乃至4点、アスティ1点、ノヴァーラ1点、ジェノヴァ1点、サレルノのロムアルド、ローマ2点その他今すぐには思い出せない小年代記類を蒐集いたしました。ただ一つ残された疑念は、私の計画があなたのご計画のいくつかを妨げることになるのではないかということですが、万一そんなことになるのであれば申しわけなく思います。しかしあなたは、あなたの祖国に関しまして、私が期待しているような最高度の自由さをお持ちになることは不可能に思われます。この点に関しまして、あなたのお気持ちを率直に述べて下されば有難く存じます」⁽⁹⁾と付け加えている。

我々の感覚から見るとしつこすぎる程ははっきりと駄目押しをした感じがするが、それに至るまでに半年余りの期間を費やしており、これでも M. としては従来にない気の使いようだったと言えるのではないだろうか。いずれにせよ、M. はこの手紙ですでに未刊の年代記だけでも27〜9点余り蒐集していると伝えており、Zeno の計画を上まわっていたと思われる。Zeno がどんな印象を受けたとしても、やはりここでは M. が一応フェアな振舞いで通していることは認めるべきであろう。それから2ヶ月後(7. 18)に、Zeno にかのライデンで彼が刊行する可能性のある草稿を、イタリアの名誉のためにできれば自分の方に回してほしいと求めている⁽¹⁰⁾のも、大した心臓だと思うが、M. としては当然なすべき行為だと確信していたものと思われる。M. にとって幸いだったことは Zeno がすでに功成り名遂げて、ウィーン宮廷詩人の地位を楽しんでいたということ、また彼自身が遠隔の地にあって、当然ヴェネツィアの出版界との縁も薄れ、年来の夢の実現が無理であることを悟っていたことだろう。

ところで、M. が抱いていた構想は、実は Zeno に伝えたよりもさらに大きなものであったようである。というのは、同年4月9日付の Sassi 宛てた手紙には、刊行予定の書物として、既刊本33点、未刊の作品39点のリストを示しており、⁽¹¹⁾ またそれを基にして行われたと思われるアンブロジーナ図書館の会議の後、Argelati は全体として folio 版で12〜15巻の規模になる予定だと M. あての手紙(21年4月23日付)で報告しているからである。実際にはさらにその2倍の

規模になったのだが、いずれにしても M. の当初の考えはこの時点で完全に新しい計画に転換されており、『エステ家史論考』の附録という構想は発展的に解消されている。以上の経過から考えてその転換期は前年の 6 月から 10 月と見なしても差支えないであろう。

第三章 Palatina協会の結成とそのメンバーたち

以上のように M. は Argelati を先兵として R. I. S. 計画の実現を進めたのだが、すでに M. が Sassi あての手紙の中で Argelati を評したことばでも見た通り、この人物を心から信用していたわけでは決してなかった。やがて M. のそうした不信感を決定付けるような出来事が発生する。

それは Argelati が 21 年 4 月 9 日付の手紙の中で出版計画の大体を記した際⁽¹⁾ に、M. に一度は各巻の全発行部数一千部の内の各 30 部を M. に無料で進呈すると約束しておきながら、それからわずか二週間後の同月 23 日付けの手紙⁽²⁾ で、M. に進呈する予定の部数を、最初の案の半分以上に当る 12 部に減らしているという事実である。

すでに見た通り M. から Argelati にあてた手紙は今日ほとんど残っていないために、M. が Argelati に対してどんな仕方で抗議したかは不明だが、同年 5 月 3 日付の Argelati から M. あての手紙⁽³⁾ で進呈部数が 24 部に増やされたという事実から考えて、M. が Argelati に相当強い圧力をかけたものと思われる。何故なら Argelati の人柄から考えて、自発的にそうした変更を行うとはとても考えられないからである。しかし M. はそれでも満足しなかったらしく、その後 Argelati は 5 月 28 日付の手紙で、アンブロジーアーナ図書館でミラノの知識人の会議が開かれ⁽⁴⁾、その決定として進呈部数は、最初 Argelati が M. に示した通りの 30 部にもどされたことを知らせている。なお M. にはそれ以外に各巻につき 100 スクードが支払われた⁽⁵⁾ とあり、その両者を合わせたものが結局今日の印税に当る M. の報酬である。このように Argelati の軽率なるふるまいは M. に大した実害を加えることはなかったものの、M. がこの男に対して有していた不信感を大いに強めることになったはずである。

なおこれと前後して、ミラノの協力者である Sassi も、Argelati 不信の念を M. に訴えていたとされている。すでに見た通り、M. の方が先に Sassi あての手紙の中で Argelati を「大口叩き」などと評していたのだが、Sassi の方でも、M. の R. I. S. 計画を自分に知らせてくれた Argelati をはげしく嫌い、M. に対してこの出版業者の悪口を繰返して、1721 年 9 月 17 日付の手紙では、「何人かのミラノの出版業者たちは、Argelati さえ入っていなければ、喜んでこの事業に加わるでしょう」⁽⁶⁾ と記して、R. I. S. 計画から Argelati を切り棄てることさえ、M. に対して勧告している程だったとされている。

この Sassi という人物⁽⁷⁾ は 1672 年にミラノに生れ、M. 同様聖職者となり、Oblati 教団に属し、1703 年以後 Collegio dei Dottori della Biblioteca Ambrogiana (アンブロジーアーナ図書館司

書団)に招かれ、同13年その筆頭者 (prefetto) となったという、M. に多少似た経歴を持つ文献学者であり、Sassi から M. あてには177通、M. から Sassi あてには132通の手紙が残っている。⁽⁹⁾ その文面を見ると、Sassi は M. がかなり気楽に物を頼んでいた相手であり、勿論 M. にとっては Argelati などよりもはるかに古くからの親しい友人であった。年令こそ同じとはいえ、ミラノ在住中からヨーロッパの学会に広く認められていた M. を、Sassi が学問の先輩として深く尊敬していたことは明らかであるが、やはり同じ文献学者としての競争意識があったことも否定できない。しかし Argelati のような出版業者に対しては、同業者としての連帯感も強かったようで、そうした心易さや仲間意識が、Sassi に先に見たような大胆な勧告を行わせたものと思わせる。またこうした事情が Argelati をいら立たせたようで、後に見るような紛争にも、こうした三人の間の関係が微妙に作用しているといえるであろう。

だが勿論 M. は、無料進呈の冊数などでおおいに憤慨したにもかかわらず、Sassi の進言には一顧だにしなかった。やはり M. は心の底では Argelati を信頼していたのであり、その最大の根拠は、結局 Argelati が、様々な欠点があるにもかかわらず、意欲的かつ積極的で、しかも有能であったことだと思われる。事実この1721年における Argelati の活躍ぶりは十分特筆に値するものであった。彼は早くもこの年の4月2日の手紙で「絶対にこの仕事をここ (ミラノ) の宮廷で (in corte) 印刷させるべきです」⁽⁹⁾ と記しているが、すでにこのころからミラノの王宮 (現在の市庁舎 Palazzo Reale) に印刷所を設けるという計画に実現のめどをつけており、さらに4月23日付で輪転機を手配したこと、5月3日付でミラノ知事の許可を得た事等を M. に報告している。⁽¹⁰⁾ しかもその間にミラノの協力者たちを組織して、何度もアンブロジーアーナ図書館で事業推進の打合わせを行っている。ところで、彼が4月2日の手紙で⁽¹¹⁾ ミラノで事業を行うべきことを強く進言した最大の理由は、ミラノでは協力者が最も得やすいということであったが、何の協力かという点で必ずしもはっきりしていなかった。少なくとも4月2日の手紙では、単に良き「校正係」が得られるという意味に取れる。悪く勘繰れば、ボランティアで校正をやってくれる有閑階級の人々が多いということのようである。少なくとも文面から見れば、この当時 Argelati には彼らから財政面の助力を得るつもりはなかったようで、資金は自分とミラノの印刷業者 Richini で半分ずつ工面したいなどと M. に伝えている。⁽¹²⁾

だが M. は、Argelati が着々と進めた計画に対して、日頃の性急さに似合わぬ、きわめて悠長な対応を示し、Argelati を大いにじらし始めている。Argelati は同年5月3日⁽¹³⁾、早くも印刷するための草稿または底本を校正担当の Sassi に送るように M. に催促し始めている。M. の手紙が残っていないので、こうした催促に M. がどんなことばで答えたかを完全な形で知ることは不可能だが、Argelati の5月28日付の手紙に「あなたが唯一の障害と見なしておられるのは、あなたが送って来られた印刷物の返還 (を確実に行うこと) で、それはあなたが、印刷の際にそれらを紛失したり、それら (の包み) をはどく際に破損しやすいということをよくご存知だからです。しかし私はそうした事柄をうまくやってのけます。すべての問題が周到に配慮されますよ

う、可能なかぎりのことをいたしましょう」⁽¹⁴⁾ という文面があるので、M. が草稿や底本を送らぬ理由は、それらが紛失されたり破損されたりして、返還されないのではないかと心配したためだったということが推察できるのである。

たしかにこれは誠にもっともな心配である。また Argelati のような大胆で荒っぽいやり方を見ていると、いくら「周到に配慮されますよう」などと保証されても余り安心できなかったであろう。事実 Argelati のこういう安っぽい保証はかえって M. の警戒心を強めたらしく、M. は一向に草稿も底本も送ろうとしなかった。そのため Argelati は、6月10日、6月25日と、同じ催促を繰返し、7月23日には、「原稿を見ないことには仕事は始まりません」⁽¹⁵⁾ と悲鳴に近いことばを記している。しかし8月20日にはむしろ開き直ったかのように「できるだけことはしますが（中略）約束できません」⁽¹⁶⁾ として、どうやら M. から出されたい原稿を保証するための紛失した場合の損害賠償に関する提案に難色を示しながらも、「とに角、それらに誠実に対処する Sassi 氏その他の人々を信用して下さい」⁽¹⁷⁾ 」と訴えている。しかしそれでも M. が送らぬため、9月24日には「私たちは取るに足らぬことで対立せねばなりません」⁽¹⁸⁾ 」と嘆き始める。しかし結局 M. の粘りに屈してさらに具体的な形で事業上のトラブルを保証するための手段を講じるに至る。

Argelati の10月7日付けの手紙には、「私はあなたの私に対する信用の乏しさには、内心大いに悲しんでいます」⁽¹⁹⁾ 」と嘆いた後、M. の要求を具体化した形でパラティーナ協会が結成されたことを報告している。

「私はあなたに、協会が結成されたことを保証します。私が（資金の）半分を持ち、残りを10人の騎士つまり Triulzi（ママ）…（他9人略）らが持ち、そのメンバーとなります。その規約は筆写されますので、あなたが保管して下さい。…⁽²⁰⁾ 」その後条件やメンバーに変更が生じたので、引用はここで止めるが、要するに当初は M. が原稿の紛失を恐れて送ってくれないため、M. への損害賠償を保証するための団体としてパラティーナ協会が結成されたと見なし得るだろう。だがすでにこの最初の報告の時点で、この団体が M. の計画を実現するため、その財政的基盤となるべき団体であることを予告している。また M. が原稿となる草稿や書物の送付を後へ延ばしていた理由も、やはり単に紛失を怖れただけではなく、Argelati に完全に資金面を自由にさせたくなかったためではないかと推察される。それは Argelati 一人に委せるには余りにも大きな事業だと思われた上に、もし Argelati がうまく資金を工面できた場合でも、彼に全面的に依存することになり、さらに不愉快な結果が十分予想できたからである。しかし Argelati のそれまでの仕事ぶりやその能力を考慮すると、Sassi がすすめたように今さら彼を計画から排除するようなことは、さすがにトラブルを恐れない M. にも実行できなかったのであろう。結局こうした諸条件を何とか充たすための苦肉の策として、それまでもこの事業に協力してくれたミラノの貴族や教養人の団体を組織して、Argelati の勝手な行動をコントロールすると共に、資金面の基礎を固めようとしたわけで、Argelati は手紙の中で、自ら率先して組織したように記しているが、

実際には M. がミラノ在住中に知り合い、アルカディア運動等を通して親しくなった人々⁽²¹⁾が中心となっている。この事業の結果イタリアを代表する出版業者としての地位を確立すると共に、財政的にも大いに恵まれた Argelati とは対照的に、この協会のメンバーたちは、多大の貢献に対して、各一部ずつの無料進呈を受けた他は、物質的報酬は全く無かったようで、約一世紀半の後に、Vischi が丹念な研究を行ったころには、この活動自体がほとんど忘れられそうになっていたということである。

なおこの協会の名称の由来について、M. も Argelati も何ら説明らしい説明を加えていないが、ローマの七つの丘の一つの名であると共に、ローマの皇帝権に付随してしばしば用いられた名称なので、この場合もオーストリアの神聖ローマ皇帝の權威の守り手という意味をこめて名付けられたものと推察される。

ところでその肝心のメンバーは、最初に Argelati が組織したものから多少手直しされ、1722年2月25日と3月1日⁽²²⁾の手紙ではば固定的な形がきまる。それによると、全資金を黄金と同様に、24 caratti (カラット) と規定し、その内12を Argelati が分担、Trivulzio 侯と Pertusati 伯の二人が2ずつ分担、残り8の内、Trotti 侯、Alberico Archinto 伯、Dadda 侯、Pozzo-Bonelli 侯、Gaetano Caccia 学士、Giuseppe Croce 学士 (騎士)、Silva 伯の7人が各1カラットを引受け、残った1を Ricalcati 侯と Gerelamo Erba 侯が半分ずつ分担することになった。なお巻頭の皇帝その他君主や権力者たちへの献辞は、Argelati が一人で執筆を引受けることに決められている。さらに、校正係 Bianchi に年1000リラ支払うこと等も決められている。それに加えて前述の Sassi や Stampa 等をはじめ、協会のメンバーが必要に応じて校正等を手伝う筈であった。M. 自身各巻に100スクードの金貨を受取っていたのはすでに見た通りで、だから Argelati の3月1日付の手紙に記されていなくとも他のメンバー、Sassi らが無給で手伝っていたわけではなさそう⁽²³⁾であるが、パラティーナ協会のメンバーに関しては、資金の払いこみから、校正の作業まではほとんど完全にボランティアで行われたと考えて差支えなさそうである。勘定高くてけちくさい筆者などには到底想像のつかない献身ぶりであるが、逆に言えば当時の貴族階級はそれだけ社会の富を独占しており、その裏返しで貴族の社会に対する義務感もそれだけ強固だったといえるであろう。さらに同年6月4日付⁽²⁴⁾の手紙で、Argelati の12カラットの内各1を Pertusati と Archinto に譲ることが決定され、一応それが最終的な協会の形態となったようである。

まず協会 (Società) の長となったのは、Alessandro Teodoro Trivulzio 侯 (marchese)⁽²⁵⁾で、1699年生れとされているので当時まだ二十二才と信じられない若さ (1763年没) であるが、その家柄の古さを考えると当時としては決して意外なことではなかった。その侯家は、パヴィーア近郊の Trivulzio という土地に発し、何と11世紀の文献にも登場し、12世紀には早くもミラノのコンソレを出したという封建領主に由来すると思われる一族で、その中でも Sforza 家支配下でも強盛を誇った Melzo 伯系統に属し、本人はスフォルツェスコ城内に今も残る Trivulzio 図書館の創設者として後世に名を留めているが、当時は旅行記や文学、政治の著作も発表し、Dorisso と

いう筆名でアルカディア学会にも加わっていた。名門と高い教養によって若年にもかかわらず協会の長の地位につき、M. よりも27才も年少にもかかわらず、年に似合わぬすぐれた分別を示して、M. にも良き助言を与え続けた。

もう一人の有力な協力者である Pertusati 伯⁽²⁶⁾ は、ミラノ貴族出身で、生年不明だが1755年に死去している。ウィーンにおけるイタリア最高審議会のメンバーでミラノの上院議長をも勤めた有力な政治家でもあり、後年ブレラ図書館の中核を成した2万4000冊の蔵書と1万2000枚のメダルを所蔵する文化的パトロンでもあった。

Alberico Archinto 伯⁽²⁷⁾ は、高名な父 Carlo (1669-1733) の子で、父はスペイン出身の貴族で Toson d'oro なる由緒ある騎士号の持主で、フランス、ドイツ、オランダを遍歴し、哲学と数学に通じ、ミラノの自宅にアカデミーを創設した人物だったが、その子の Alberico は、1722年パヴィーア大学を卒業、その後ミラノの教会や修道院を管理する機関 Collegio dei Nobili giureconsulti に入って聖職者となり、1730年にはボローニャの副法王使節、1739年には Nicea 大司教に就任、さらにトスカーナ法王庁大使等を歴任し、1756年 Archinto と同じ法王庁内の開明派で、M. の友人でもあった法王 Benedetto XIV 世によって枢機卿に任命されている。だが、イエズス会への工作を企てている途中で急死し、毒殺の疑いのため検死されたが、心窩部のけいれんの結果と見なされた。反動派によって殺害された疑いが大きく、トスカーナ大使時代にはフィレンツェにおける異端審問に対するトスカーナ大公の抗議を調停する等、ローマ教会の近代化を推進した結果の犠牲だったといえるだろう。

Donato Silva 伯⁽²⁸⁾ は1690年ミラノ貴族の両親より生れ、ローマで学んだ後、M. の有力な協力者として、この事業の経理や印刷業務を担当するかたわら、注解等をも行った。文献学者として論文等も残し、資料刊行に協力している。

G. B. Trotti 伯⁽²⁹⁾ は、法律家兼外交官で、1737年皇帝 Carlo VI 世に派遣されて、Parma-Piacenza 公領を統治した人物である。

その他の人々については、残念ながらほとんど分かっていないのだが、Giuseppe d'Adda 侯⁽³⁰⁾ は、1713年ミラノ市の最高機関の一つで、職員や傭兵の給料の調達に当たった Dodici di Provvisione (調達十二人委員会) のメンバーだったとされ、G. Pozzo-Bonelli 侯⁽³¹⁾ (1689-1755) は墓碑に「ただ祖国と貧民のために生きた」と記されている有徳の士であり、G. Erba および Ricalcati の両侯は、その称号以外は何も分らない。残る Caccia と Croce については全く不明である。なお彼らは1カラットにつき第一回目に1500リラ、第二回目に200リラの献金を行い、その後必要に応じて何度かの献金が行われた結果、20年間で各メンバーは5000スクード(当時1スクード=7リラ)余りの献金を行ったとされている⁽³²⁾ が、後で検討する通りその金額には多少疑問の余地があるように思われる。

以上のメンバーから推察しうるパラティーナ協会の性格は、侯、伯らの称号からも明らかな通り、ミラノの上層貴族(それは高位聖職者の母胎でもあった)の文化的集団で、その目的は文献

保存と刊行の活動であったといえる。特に侯が中心であるということは、古い出自を誇る封建貴族につながる都市貴族たちがその中核を成していることを意味し、その活動は自らの出自に対する個人的関心と必ずしも無縁ではなさそうである。

ミラノ史をひもとく時、18世紀の初頭というこの時代は、ミラノにとって決して経済的に好況な時期ではなかったと見なされており⁽³³⁾、少なくともミラノ側だけを見ると、R. I. S. の事業を支えたのは、新興市民などでは全くなくて、あくまで同市でも最も古い階層に属する貴族階級であった。彼らは単に資金の半分以上を分担しただけではなくて、事業自体にも協力し、実務を担当する人もいれば、たとえば Archinto が Arnolfo の作品に注をつけた⁽³⁴⁾ ように、注釈や校正にまでボランティアとして参加したのだった。ただしそうした協力を組織し活用したのは、M. 自身と、Argelati と Sassi という農民もしくは市民出身の人々で、この後見る通り必ずしも仲が良かったとは言えないこれらの三人が、最上層の人々の協力によって大事業を完成したのであった。

こうしたミラノ貴族たちの団体に対して、モデナの高官としての M. の立場を代表してその利益の保護に当たったのは、don Mauro Alessandro Lazzarelli⁽³⁵⁾ であった。彼は当時モデナ公国のミラノ駐在官 (residente in Milano) の地位にあり、1721年12月15日には、計30編分の作品の草稿もしくは文献を、印刷のために Trivulzio 侯の手中に引き渡し、他方同侯はパラティーナ協会の約定に基づき、200ドブリア金貨を上記の原稿類の保証金として預けている⁽³⁶⁾。M. の原稿保全への要求は、毎回同額の保証金を積むことで一応の結着を見たものである。

なおここにはもう一つ検閲という、当時の出版事業における一大問題が控えていた。パラティーナ協会と M. は、法王の許可を求めず、皇帝の承認のみで刊行を行った。だからとびらのページには、法王庁のお墨付きを得て出版したことを示す「Imprimatur (出版さるべし)」ということばは印刷されておらず、単に「上部の許可により (Superiorum permissu)」とのみ記されているという⁽³⁷⁾。1723年に R. I. S. の最初の2巻が刊行されると、予想通り、法王庁は「懲戒 (censura)」の脅しと共に、法王庁の Congregazione dei Riti (儀典聖省) より、出版停止を命じる手紙が届いた⁽³⁸⁾。折良くウィーンにいた Pertusati 伯は、M. よりこの知らせを受けて皇帝 Carlo VI 世に事態を報告し、皇帝はその勧告に従い、事業を保護しようと約束して、ウィーン在住の法王使節に自分の意図を伝えた。その圧力が効を奏して、法王庁の態度が軟化、事業は黙認されることとなって続行された⁽³⁹⁾。

当時ウィーンに在住中のモデナ公国の使節 Gherardi もこの工作に協力した。当時のモデナ公 Rinaldo I d' Este は、当初 R. I. S. の刊行がモデナで行われることを望んでいたことが、1721年4月23日に M. がミラノ駐在官 Lazzarelli あてに書いた手紙の中に記されている⁽⁴⁰⁾ が、M. は財政的にも、協力者の点でもそれを無理と見て無視し、すでに見たようにミラノで実行した。しかしモデナ公国は全面的にこの事業を応援した。M. の影響力の大きさだけでなく、Rinaldo 公の度量の大きさが窺われる事実である。

第四章 R. I. S. 出版の進行とそれをめぐる様々なトラブル

パラティーナ協会の成立によって、M. がもっとも危惧した原稿類の紛失等に対して巨額の保証金が積み立てられると共に、当初 Argelati が M. に予告したよりもずっと確実で、しかも権威ある財政的基盤が確立された。その組織の大体の輪郭が成立し、公式に M. からの原稿類がパラティーナ協会に引き渡されたところには、Argelati は持ち前の行動力を発揮して、直ちに印刷できる体制を用意しつつあった。特にこの事業を成功させた理由の一つは、彼が当時のミラノ知事である Colloredo から「王宮 (Palazzo Reale)」一階の四分の一に当る部分を印刷所として借りうけたこと⁽¹⁾で、途中火災のため他所に避難、移転することになったが、やはりそうした公的な場所で活動を開始したことで、事業への信用は高まり、長期にわたって安定した形で持続しえたことは疑いの余地があるまい。さらに名義上はミラノの王室印刷業者 (Stampatore regio) Richini によって、しかし実際にはヴェネツィアの印刷業者 Bellagatta (彼は法王庁出入りの業者だったので名前を秘した) を通して、オランダから最上質の活字の母型を輸入、たまたまボローニャからミラノに逃亡中だった有能な職人 Koeblin を雇ってギリシャ文字を含む様々な種類の活字の鑄造を行わせた⁽²⁾。

他方紙も Argelati が自らピエモンテの Pella まで赴いて、早くも1721年5月7日以来、最上質の紙を契約⁽³⁾、同年10月7日にはM. に活字や印刷の見本と共に紙の見本も贈っている。その際 Argelati は満足の余り、「こんな素晴らしい品物を見たことがありますか」⁽⁴⁾と M. に質問しているほどである。

さらに印刷所に関しては、「職長 (proto)⁽⁵⁾」役に Ghisolfi なる人物を起用した。この人物はただ一度多少の不注意について苦情があったことを除くと、一度も苦情を記されていないということで、大変優秀な職長であっただろうと推定されている。

校正係としては、前述の Sassi の他、Lattuanda, Stampa 等の協力者の他に、1000ミラノ・リラの年俸でナポリ人の dottor Orazio Bianchi⁽⁶⁾ なる人物を専任の校正係として傭い入れた。Argelati はこの人物を Sassi に対する対抗馬として重用していたようであり、M. への手紙にも度々出てくる⁽⁷⁾。

先に少し見たが、印刷にかかった実際の費用はどうであったのかを、Vischi の計算に従って簡単に眺めておこう。まず Vischi は、当時の通説として、パラティーナ教会員は最初の年以来、各人共に4000フィリップ (金貨) 支払ったと伝えられていた、としてその由来を検討する⁽⁸⁾。

Vischi によると、その説の由来は、Argelati が1721年4月23日付の手紙で記した「全部で1000部が印刷され、その費用は各々の巻につき4000フィリップに達するでしょう」⁽⁹⁾ということだったが、Argelati の計算に従うと、当時の予定では全巻は15巻に及び、その経費の総額は60000フィリップに達する筈で、パラティーナ協会のメンバーが世間では16人と推定されていたので、各自が4000ずつ出せば必要経費をある程度上回るのではないかと見積られたものと (Vischi によって)

考えられている。極めて大ざっぱな計算のようで、Vischi自身も実費がそうであったことは考えず、単価等ははるかにそれを下回ったものと推定している。

Trivulzio の証言によると、当初 R. I. S. は一冊20リラ乃至18リラで売られた⁽¹⁰⁾ ので、実費は14リラ（2 フィリッポ）と推定しうる。だがその後1727年10月27日現在、Argelati は、Berretta 神父の地図を含めて総額13000リラかかったと嘆いているのでその巻の一冊の実費13リラと計算される。だからそれ以前の実費はせいぜい10リラ程度と推定しうる。もう一つの数字は、Argelati が1727年9月10日にM. あてに書いた手紙に見られるもので、当時12巻刊行済みで、全経費を114000リラ（1冊当り9.5リラ）乃至120000リラ（1冊10リラ）だったと報告していて、さらに6巻が刊行された1730年3月1日現在、その経費は180000リラに達している⁽¹¹⁾ という。しかし Argelati は用心のため公的には各巻の実費を14リラとして計算している。Argelati は、全経費を24カラットとして、各人の持ち分に比例して、それらの実費を会員に負担させていて、集めたそれらの費用を次の出版に当てている。当初の計算では各巻4000フィリッポ（28000リラ）と計算されていたのだから、半分以下の経費で刊行することが可能だったということになる。

このように考えると、Argelati は極めて有利な条件でこの事業をすすめたはずだが、当初は輪転機三台分の費用や活字、用紙代および人件費等を一挙に負担せねばならなかった上に、火災で工場を移したりしたため Argelati は極めて苦しい立場におかれて、すでに1723年8月4日付⁽¹²⁾ の手紙でもはや資金が底をついたと嘆いている程である。また Argelati は、事業の財政状態が好転しても、容易にその実態を公表しようとはせず、後にパラティーナ協会員たちから何度も決算報告を求められ、1732年1月23日の M. あての手紙で、d'Adda 侯と共にその準備をしている途中だと伝えているが、結局その時点では決算報告は公表されなかったようだと Vischi は考えている⁽¹³⁾。

実際に協会員が支払ったお金として、今日はっきりしているのは、一回目の払いこみが1723年の1カラットにつき1500リラ（Argelati の場合15000リラ＝約2000フィリッポ）、1724年の二回目、1カラットにつき200リラ程度で、後何度も細かく払い込まねばならなかったようだが、総額になるともう一つはっきりしない。Vischi によると、約20年間で、全28巻のために各メンバーが一人あたり5000スクード余り払ったとされている⁽¹⁴⁾ が、この数字の根拠ははっきりしない。もっともパラティーナ協会のメンバーを、Argelati も含めて11人とし、1冊分の経費を（単価14リラ×1000部＝）14000リラと見ると、28冊分の総経費を392000リラとなり、各メンバーの数で単純平均すると、一人当り約36000リラ＝約5000スクードの負担という数字が一応出てくるだろう。しかし実際の負担は24等分されてその内の10カラットを Argelati が負担したとされており、メンバーの大半を占める1カラット会員の場合には、先の総経費の24分の1＝約16000リラ＝約2300スクード程度の負担だったとも考えられなくもない。もっとも物価の変動等を考慮するとその2倍の経費もありえないわけではない。兎に角やがて Argelati の財政が好転すると、会員たちの不満は強まっていかなるを得なかった。Argelati は決してガラス張りで事業をすすめなかつ

たので、本来自分が負担すべき分まで他の会員に押しつけた可能性は十分考えられる。だが M. 自身の研究活動の発展のためには、こうしたやり方が有利に作用したというのが、皮肉な事実なのである。

要するに、Argelati はうまく経理の公開を逃げ通して、集った資金を R. I. S. 刊行や M. の中世史研究の論文集や Sigonio の作品集⁽¹⁵⁾ の出版に回転して行ったのであり、Vischi の調査をもってしても、以上に示したような断片的な数字以上のことは不明だったのである。あるいは現実問題として、Argelati や経理を担当したとされる d'Adda 侯らにも、最初からの資金の流れが完全には掌握されていなかった可能性も考えられるが、すでに見た通りの大きな粉飾ぶりから考え、また部分的には極めて詳細な M. への説明ぶり（特に経理を除いた部分に著しい）から考えると、Argelati 自身が様々な資料を湮滅させた可能性も決して小さくはなさそうである。特に Argelati が R. I. S. の刊行を可能な限り続けようとすると共に、M. の論文集の公刊も計画しており、しかも R. I. S. 出版のための印刷所をそのためについでに利用しようと目論んでいた点を考慮すると、Argelati は一種の確信犯的な信念に基づいてそうした湮滅を行ったという想像も、決して荒唐無稽な空想として斥けてはしまえないように思われるのである。M. の集めた膨大な資料類とその論文集には、それだけの魅力があったのである。いずれにせよ、Vischi の調査をもってしても、事業の全体像を精密に把握することはできなかった。だから個人の負担について正確な数字を知ることが不可能なのであるが、以上に示した大まかな数字が、我々が推定する限界のようである。

事業が実際に開始されたのは、22年2月18日付の Sassi の M. あての手紙に「計画されている出版を読者の目に快く読み易いものにするため、もっとも適した活字の種類や注の位置を調整するために、すでに何度も試み刷りを済ませましたので、次の月曜日から印刷が始められるでしょう」⁽¹⁶⁾ と記しているため、同月下旬と考えられるが、翌月12日には、M. が同じ Sassi あてに「印刷の開始が迫っているという嬉しいニュースに対し、それが久しく続きますことを祈り始めましょう」⁽¹⁷⁾ と書いているので、あるいは少し遅れたのかも知れない。しかし3月18日に Trivulzio が M. あてに「昨日、知事が我々の印刷を視察に来られ、5～6葉やって見せました」⁽¹⁸⁾ と記しており、この時期にはすでに進行中だったことが分る。同じころの M. の手紙は、必ずしも希望に充ちておらず、異端審問官を大いに意識している。だが印刷事業は順調に進み、Argelati は6月15日から第三の輪転機が動き始めると M. に伝えている⁽¹⁹⁾。こうして第一巻と第二巻は、1723年10月14日同時に世に出ている。それらに対する法王庁の反応と皇帝側の交渉についてはすでに記した。

1723年12月の20日ごろには、印刷所のある王宮に火事が起こり⁽²⁰⁾ Trivulzio ら協会員たちをひやりとさせた。火は、印刷所の真上にある「軍事書記局 (Segreteria di guerra)」にまで燃え移ったが、人々はただちに大部分の品物を、近くの Carlo Archinto 邸と、一部は Trivulzio 邸に運んで被災をまぬがれることができた。もし大量に用意されていた紙に燃え移っていたら、王

宮全体はおろか、市街にも燃え移っていた筈だが、幸い火は明け方四時ごろに消えたとされている。その際通りを隔てた隣の大劇場(今のスカラ座)は辛うじて類焼を免れたが、間もなく行われるオペラの舞台装置が王宮二階の広間に準備されていたため、火災の際に地上に投げ落とされて壊され、興行師は大きな損害を受けたという。この騒ぎで R. I. S. 印刷は当然中断され、紙等の資材も破損されざるを得なかった。避難先の Archinto 邸では、八室を用いてようやく収容し、15人がかりで整理に当たったとされている⁽²¹⁾。

やがて翌年1月になると、彼らは「イストリオーニ(道化師の意)小劇場」に場所を見出して、Richini らがその一隅で活動を再開⁽²²⁾。ただし1日1フォリオの印刷しか出来ず、おまけにこれまでの王宮内の場所を、被災した「軍事書記局」によって占拠されそうになったために、Argelati は M. に連絡、M. から早速知事 Colloredo に手紙を書いた所、知事も24年2月に好意的な返答を行った⁽²³⁾。しかし実際に従来の場所には戻れなかったようで、その後も仮住まいに輪転機を二台備えて続行せざるをえなかったらしい。何とか恒久的な施設のめどがつくのはようやく1726年6月のことで、実現したのは翌27年7月のこととされている⁽²⁴⁾。しかし上述の知事の手紙でもこの事業は高く評価されており、ほとんど公的活動の一環のごとく見なされていることも否定できないように思われる。なお仮住まいで事業中に、大雨で製紙工場が被害を受けており、Argelati を悩ましていた(1725年6月)。こうした災難のために、特に1720年代には、Argelati は資金や活字、紙等の欠如に悩まされたようである⁽²⁵⁾。だから24年から27年にかけて、Argelati は極めて不機嫌な手紙を M. らに書き送り(たとえば25年2月14日⁽²⁶⁾)、また24年10月4日には M. あてに支払い計算書を送って、「1ソルドまでしらべても、(騎士たちは)ただ一つのあやまりも疑わしい点も見つけませんでした⁽²⁷⁾」と書いている。この当時の Argelati はまさにどん底にあって、清廉潔白たらざるを得なかったのである。こうした資金集め等の苦勞を考えると、Argelati がこの事業で特権的な地位を与えられていると信じ、事業の主役として R. I. S. の各巻の冒頭に献辞を書くこと位、当然すぎる程の権利だと信じたとしても、少しも意外な事柄ではあるまい。ところが Sassi のような立場の人間から見ると、当初 M. との連絡係程度に考えていた、当時全く無名のボローニャの書籍商が、ミラノきっての大貴族たちのグループを代表して、毎巻巻頭に結構長文の献辞を、いかにももっともらしいラテン語で発表することは、許すべからざる越権行為に他ならなかった。Argelati も Sassi の冷たい視線が分からないほど単純ではなかったので、当然摩擦が生じる。

早くも1722年の7月～8月の段階で両者の関係は悪化⁽²⁸⁾、しかし、Trivulzio の仲裁で一応事無きを得、Argelati は M. らの既定の方針通り、R. I. S. の献辞や序文を執筆することが許された。

だが1724年 Sassi が Landolfo Juniore の作品に注をつけて M. に送付し意見を求めた所、M. が5月11日付の手紙で、「直すべき余地はありません」⁽²⁹⁾と一応はめて置きながら、冗長すぎると批判したことで Sassi の怒りは再燃した。Sassi の具体的に訂正してほしいという抗議に対

し、M. から仲裁を頼まれた Trivulzio は、Sassi の要求通り M. が適当に Sassi の注を取捨選択するよう勧めて自分は加わらなかった⁽³⁰⁾。だがこれは単なる前哨戦で、それまでのいろいろないきさつから腹を立てていた Sassi は、その翌年 M. がアンブロジーアーナ図書館から入手した Romualdo の『年代記』から、出版に価すると信じた部分だけを選び、それに自分の序文を付して印刷に回したのを見て、『年代記』の原稿を本来の全文に戻した上、M. の序文に、自分が何故 M. の方針を変更したのかを説明した自分の序文をも加えて、印刷所に回すという驚くべき非常手段に訴えている⁽³¹⁾。実は Argelati は、すでに25年7月11日付の手紙で、M. に「Sassi 氏はあなたの序文の後に序文を書き、また何らかの訂正を加えました。」⁽³²⁾とあらかじめ伝えていたのだが、M. が発見した校正刷りはその程度のもではなかったのだ。M. は驚いて早速 Argelati に抗議したらしいが、その手紙は残っておらず、それに対する Argelati の返事は残っている。その中で Argelati は自分がやらしただけではないと主張、「4年間で12年分も年を取った上に⁽³³⁾」と大いにぼやいている。さらに Argelati は Orsi 伯にも手紙を書き、自分は M. を尊敬しているが、M. は二つのことを誤解している云々と弁明している。Argelati から連絡を受けた Trivulzio は、これ以上避けて通れない問題だと観念し、同年8月1日付で、素晴らしい慰めと説得の手紙を M. あてに書いている。Trivulzio はその中で、今度の事態では M. が正しく、Sassi が誤っていることを一応認めた上で、しかし Sassi は原稿がアンブロジーアーナ図書館のものだとしていることも知らせた後、Argelati はもっと Sassi に配慮すべきだったと記し、さらに「私は事業の長であり刊行者であるあなたのためにより以上の注意を払い、便宜をはかるべきだということを十二分に理解しておりますが、公共の利益のためには（あなたが）忍耐し、何らかの犠牲を払うべきだと思います⁽³⁴⁾」として、M. の自重をうながしている。他方 M. は Lazzarelli を介して、Trivulzio の協力を得、自分の所信を通そうとする。Trivulzio はそれを知り、8月8日再び M. に対して慰めと忠告の手紙を書き、Sassi はアンブロジーアーナ図書館の司書長 (prefetto) であり、彼の行為の背後に図書館の所有者 Borromeo 家の意志が働いていることを示唆し、自重を説く。Vischi はこの手紙を特に高く評価している⁽³⁵⁾。M. はその手紙の趣旨を受け入れ、Sassi に手紙を書こうと約束。同月9日には、先ず Sassi あてにわずか7行の手紙⁽³⁶⁾で、自著 *Anecdotti* を送ったことを知らせたのに対して、Sassi の方から先制攻撃が始まった。

Sassi は8月12日付の手紙で、まず本を受け取ったことを知らせた後、M. が怒っていないのが不思議だと記し、しかし自分はやるべきことをやっただけだと開き直り、Argelati の良い加減さを非難し、自分は Cleria Borromeo 伯妃から、この事業に参加しても何も得ないし、名誉も得られず、不愉快な思いをするだけだから、他人に頼らず独りで研究を続けなさいと忠告されたが、不運な自分はその忠告に反したためこんな不幸や嘲罵を受けていると嘆いている⁽³⁷⁾。

M. はそれと相前後した形で、同月15日（日付が余りにも接近しているので前文の返事かどうかは怪しい）に、自分が何故憤慨したのかを説明し、まず「私を不快にしたのはあなたの序文ではありません」⁽³⁸⁾と記して、自分が怒ったのは、Romualdo の全文を刊行するつもりではない

と予告しておいたのに、全文を出すことになったためだと説明している。そんなことを問題にするわけは、ライブツィヒやヴェネツィアの新聞で M. が R. I. S. 刊行事業の「長 (principale)」ではなくて、ミラノの紳士たちに仕えているだけだと報道されており、世間でもそういう考えの人々が多いからで、今回また予告を守らなければ、そうした誤った風聞が真実だと信じこまれてしまうためであるという、やや奇妙な説明をしている⁽³⁹⁾。ただし Vischi はライブツィヒ等でパラティーナ協会に関して、実質とはかなり異なった形で伝えられていたこと⁽⁴⁰⁾を記しているの、M. の危惧も必ずしも事実無根ではないようだが、やはりこの場合には苦しい弁解のように感じられなくもない。さらに同じ手紙で M. は Sassi の注を「秀れたもの、まことに秀れたもの (buone buonissime le note sue)⁽⁴¹⁾」と褒め称えている。そして結論として、「私はすでに成されたことに自分を合わせましょう⁽⁴²⁾」と記して、Romualdo の『年代記』は全文掲載すること、その代り Sassi の序文は除き、自分が序文を書き直し、自分の考えで全文収録することに方針を改めたことを公けにすること、Sassi には「読者への助言 (monitum)」を書いてもらって加えること等を提案した。M. は Trivulzio のみならず、モデナ公国のミラノ駐在官 Lazzarelli らの忠告で、一時期の強気の方針 (アンブロジーアーナ図書館の本を使わぬ等々) を引っこめて、こうした妥協の道を選んだわけである。しかしそれでも Sassi は満足せず、8月22日付の M. あての手紙の中では、「まるであなたが主人で、私は助手か門番のよう⁽⁴³⁾」と、アンブロジーアーナ図書館の文献を我物顔で利用する M. を皮肉り、自分は R. I. S. の事業から一切手を引きたいと申し出る一方で、「あなたが良かれとお考えの通り、好きなように切るなり、変えるなり、訂正するなりして下さっても一言も文句を言いませんが、ただ私は何としても Romualdo について別の序文を書くことだけはしたくありません。すでにそのことでは十分我慢してきましたから⁽⁴⁴⁾」と、半ば自暴自棄気味に M. の提案を拒否してしまう。一時期はこうして暗礁に乗り上げるが、M. は Trivulzio や Lazzarelli らの忠告を受け入れて再度妥協し、結局 Sassi の序文等もそのまま活字にしてしまうことを認め、さらに何度か Sassi に協力を要請し⁽⁴⁵⁾、Sassi の方も序文に関して面子が立ったので Trivulzio の説得を受け入れて協力関係に戻る。M. も 9月19日付の Lazzarelli あての手紙で「私は何とか自分自身に打ち克つことと、他人の要求やあなたの賢明な忠告を受け入れることができました。だから平和になりました。⁽⁴⁶⁾」として、事態は収拾されてしまう。もっとも私の考えでは、この場合の Sassi の主張の背後には、M. の文献の扱い方に対する疑問があったように思われる。特に迷信や非合理的な言説を嫌った M. は、古い年代記類に混入している神話や伝説、荒唐無稽な民話の類をも尊重せず、歴史の資料として信頼できる部分のみを活用しようとした。だから Romualdo に関しても、信頼に価する部分のみを活字にしようとしたふしがあるが、忠実な文献学者の Sassi には、M. のそうした恣意的な態度が不満だったのではないだろうか。後世の我々から見ると、いかに一見荒唐無稽であろうとも、古い文献は一つの文化財として成可く原型のまま保存されていた方が有り難く、Sassi の要求にも正しい点があるように思われる。また M. 自身も、実際にはそれ程単純な合理主義者ではなかったはずで、珍し

くM. が大巾に譲歩した所を見ると、やはり彼自身 Sassi の批判にある程度道理を認めていたものと思われる。

これらの紛争を通して痛感されるのは、Trivulzio 侯ら協会の無私誠実で視野が広く賢明な仲裁ぶりである。Vischi が引用した手紙の中で、Trivulzio は今回譲歩してもそのことは決してM. の名声を傷つけず、むしろ事業の成功によってそれを飛躍させると諫言しているが、その見通しは、当時の貴族の良識を証言している。

終章 R. I. S. からAntiquitates Italicae Medii Aeviへ

以上のような様々なトラブルを体験しつつも、R. I. S. の事業は順調に進行し、巻数を重ねるにつれてヨーロッパ中の注目を集めて、M. のみならずイタリアの歴史学の声価を高めて行った。18世紀の30年代には、ポーランド継承戦争(1733-5)が勃発して、一時期ミラノもフランスおよびサルデーニャ両王国の軍隊に占領されるという事態⁽¹⁾が生じ、皇帝軍による領地回復後もロンバルディーア地方の住民は窮乏を強いられたといわれている。こうして人心は従来の落着きを失い、R. I. S. のような長期の事業にとっても、不利な状況が生じる。Vischi はこの時代を、「失意と疲労の時期⁽²⁾」と呼んでいるが、パラティーナ協会の会員である貴族たちは、まさにそうした心境に陥っていた。

彼等をそうした心境に追いやった理由の一つは、Argelati が余りにも意気軒高であったためだと言えなくもなさそうである。Argelati が20年代の中ばまで、かなりの経済的苦境に陥っていたことはすでに見たが、早くも1723年に、知事が Trivulzio を相手に嘆いたといわれる程の厚顔さで皇帝に陳情⁽³⁾（おそらく最初の二巻を見本として示して運動したはずである）した挙句、年300スクードという多額の年金を獲得し、それが1733年には、それまでの業績を考慮して倍額に増やしてもらうことに成功している⁽⁴⁾。たとえば Vico が生涯の久しきにわたって年俸100ドゥカートのみで修辭学を教えたとか⁽⁵⁾、M. がミラノからモデナに帰国した際、まだ30才足らずの身で、cento doppie（ドッピア貨100枚）⁽⁶⁾で文書館長兼図書館長に召し抱えられたという事実を勘案すると、年金600スクードは、決して馬鹿にならない資金だったことが分かるはずである。刊行された書物が順調に売れていて、しかも Argelati がこれほどの年金を得ている以上、彼はもう少し会員への利益還元を考え、せめて負担軽減を考慮すべきだったはずだが、そうした配慮なしに彼は従来の方針を継続したようである。だからすでに1728年8月25日付の手紙の中で、Trivulzio はM. に「そんなやり方で、無意味なものまで出版せぬため、刊行巻数を決めるようにと説得しようと、私は Argelati と長時間論議しました⁽⁷⁾」と記している程で、それを読んだM. も Argelati に警告せざるを得なかったらしいが、Argelati はまだ必ず刊行すべき年代記があると10点を示した後、Trivulzio 自身の推薦した本も残っている上に、Silva, Trotti, Erba らはまだまだやる気だから Trivulzio に手紙を書いてくれるだろうとして、あくまで強気である。彼は同じ手紙の中

で、「あなたは1ソルドも払わずに、むしろ毎巻毎に100スクード得ておられ、すでに現在で1400スクード得ておられる⁽⁸⁾」としてあなたに迷惑はかけない、といった趣旨のことばが見られることは興味深い。この文面からも明らかな通り、この時点では Argelati は出せばどんどん売れる本を打ち切るつもりなどはさらさら無く、M. 自身もたとえ謝礼など無くても、兎に角一卷でも余分に出したかった筈で、両者は利害が一致していたわけであり、これでは当初予定されていた15巻を過ぎても中々打ち切りにはならなかったはずである。そこで様々なやり取りの後、Trivulzio は(30年6月21日)、早く巻数を決めよと改めて要求した手紙の中で「もし記憶が私を裏切っていなければ(中略)私はあなたにそのことを三〜四度書きましたが、私たちの資金と期待のすべてから、私たちは8年間に作品を一組得た以外何の収益もなく、何時我々が払い戻ししてもらえるのか誰も知らない(Dio sa quando…)からです⁽⁹⁾」とM. に記している。そして彼は最後に「もしできますれば一年以内とし、22巻を越えないようお願いしたいものです⁽¹⁰⁾」と要望している。こうした要望にもかかわらず、Argelati と M. は1737年に27巻を刊行するまで事業を続けており、しかもその間に Argelati は会員の怒りを無視して Sigonio の作品集を刊行する⁽¹¹⁾。ただし、元のパラティーナ協会員が R. I. S. 刊行に関してタッチしたのは、1736年10月9日の会議までのことらしい。⁽¹²⁾ というのは、この会議で Argelati が一応の精算(conto)を行い、引き続いて行方 M. の中世に関する論文集 *Antiquitates Italicae Medii Aevi* の刊行を決定しているからで、同論文集は各巻1500部ずつ刊行することが決められ、協会は再発足している。結局配当は全く無かったらしい。

この時の精算(conto)の内容は、Vischi にもよく分らぬらしく、立ち入った記載はない。ただもし Argelati が収益の払い戻しなどをしていれば、その旨を M. にくわしく報告して大いに宣伝した筈だが、少なくとも現在刊行されている Argelati の書簡集には、1736年前後の M. あての手紙のどこにもそうした記述はない。Argelati は1734年1月24日付の手紙で、M. に、*Antiquitates* 刊行の資金をすでに2000スクード用意したと伝えている⁽¹³⁾ ので、あるいは余ったお金を *Antiquitates* 刊行の準備金だとして、口頭で説明することで切り抜けたのであろうか。

いずれにせよ、パラティーナ協会員たちは、すでに十分懲りている筈であるにもかかわらず、多少の変化はあっても、又ぞろ M. と Argelati らの事業を援助することに決めて、この全6巻の刊行に付き合っているのである。その証拠に、1737年1月2日、R. I. S. 打ち切りの急先鋒だった筈の Trivulzio の手に、capitano Milani (何者なのか不明)によって、M. の中世史に関する莫大な量の論文と資料の原稿(百科辞典クラスの書物6冊分)が渡され⁽¹⁴⁾、1738年に第1巻が出版され、同42年に全6巻が完結しているからである⁽¹⁵⁾。各巻の値段は小型版22リラ、大型版30リラだったとされている。

さらに1751年、M. の死後に、索引と若干の文献をまとめた R. I. S. 第28巻が刊行される⁽¹⁶⁾。

ただし第28巻は、Vol. XXVIIIとも、Tom. XXVとも記される。それは、Tom. I〜IIIには、それぞれ後でP. II(第二部)が追加されたからで、巻数はTom. の数よりも3だけ多いわけであ

る。

今世紀に入って、ボローニャおよびチッタ・ディ・カステッロから、R. I. S. の新版が刊行されていることはすでに記したが、本学に收藏されているのはその新版で、イタリア史研究に必須の資料である。

注

はじめに

- (1) *Bullettino dell' Istituto Storico Italiano per il Medio Evo e Archivio Muratoriano*はローマのイタリア中世史研究所より発行されている学術誌。1889年創刊。
- (2) この論争史については、C. T. Davis, *The Malispini Question*, in “*Studi Medievali*”, Spoleto 1970, III s. X. および N. C. De Matteis, *Malispini da Villani o Villani da Malispini*, in “*B. d. I. S. I. p. M. E. e. A. M.*”, N. 84, Roma 1972-73. 参照。
- (3) G. Soli(mano) Muratori, *Vita del Proposto L. A. Muratori*, Venezia 1756, pp. 77-79.
- (4) Luigi Vischi, *La Società Palatina di Milano*, Milano 1881.

第一章

- (1) E. C. Pirani, *Mostra Storico-Bibliografica dei R. I. S.*, Modena 1950, P. I.
- (2) Vischi, *op. cit.*, p. 5.
- (3) *Id.*
- (4) *Id.*
- (5) *Id.*, p. 6.
- (6) Zenoに関する記事は、V. Branca監修, *Dizionario Critico della Letteratura Italiana*, Vol. III, Torino 1974, pp. 665-671.
- (7) この旅行については、拙稿、文献学者から歴史家へ、『大阪外大学報』75-3, 大阪 1987, pp. 93-97. 参照。
- (8) Matteo Càmpori編, *Epistolario di L. A. Muratori*, Vol. IV, Modena p.190, および, Vol. V, Modena 1903, p. 1702.
- (9) Vischi, *op. cit.*, p. 13.
- (10) G. Carducci, *Prefazione*, R. I. S. N. E., T. I. P. I, *Citta di Castello* 1900, pp. XIX-LXXI.
- (11) A. Andreoli, *Nascita dei R. I. S.*, in “*Nel mondo di L. A. Muratori*”, Bologna 1972, pp. 241-255.
- (12) この書簡は、Càmpori 編の *Epistolario* にはない。
- (13) Argelati の伝記は、C. Vianello 監修の *Carteggio con F. Argelati*, Firenze 1976, P. 1のnota, および Vischi, *op. cit.*, p. 175.
- (14) *Id.*
- (15) *Id.*, pp.17-19.
- (16) *Id.*, pp. 28-29.
- (17) *Epistolario*, edito e curato da Matteo Càmpori, Vol. VIII, Modena 1905, p. 3564., Vol. IX, Modena 1905, p. 3831, Vol. X, Modena 1906, pp. 4406-7.
- (18) Vischi, *op. cit.*, p. 19.
- (19) *Epistolario*, Vol. V, Modena, 1903, p. 2048.
- (20) Andreoli, *op. cit.* 所収 *Nascita di R. I. S.*
- (21) *Id.*, p. 247.
- (22) S. R. B. (別名 S. B. i.), *Voll. I - III*, Hannover 1707-1711.

- (23) 拙稿, エステ家の起源を求めて, 『イタリア学会誌』第XXXVIII号所収, 東京1988, 参照。
- (24) Càmpori編, Corrispondenza tra L. A. Muratori e G.G. Leibniz, Modena 1982, p. 278.
- (25) Id. のnota.

第二章

- (1) Epistolario, op. cit., Vol. V, Modena 1703, p. 2053.
- (2) Id., p. 2064. なお文中のMaffei侯とは, Scipione Maffei (1675-1755) のこと。M. と同時代に歴史家, 文献学者, 印章等の研究家として活躍し, 演劇史にもくわしく自らも喜劇やメロドラマを書く。イタリアの古碑文等にもくわしく, M. のNovus Thesaurus Veterum Inscriptionumを酷評したこともあるが, 文通仲間でもあった。
- (3) Mostra, op. cit., p. 2.
- (4) Epistolario, op. cit., Vol. V, pp. 2073-5.
- (5) Id.
- (6) Id., p. 2074.
- (7) G. Soli(mano) Muratori, op. cit., pp. 114-118.
- (8) Epistolario, Vol. V, op. cit., p. 2100.
- (9) Id.
- (10) Id., p. 2111.
- (11) Id., pp. 2092-94.
- (12) C. Vianello, Carteggio, op. cit., p. 35.

第三章

- (1) Vianello, Carteggio, op. cit., p. 35.
- (2) Id., p. 36.
- (3) Id., p. 37.
- (4) Id.
- (5) Vischi, op. cit., p. 151. Argelatiの1728. 12. 22. の手紙による。
- (6) Id. p. 31.
- (7) Enciclopedia Italiana, Vol. XXX, Roma 1949, p. 31.
- (8) Epistolario, Appendice III, Modena 1922, p. 7065.
- (9) Carteggio, op. cit., p. 34.
- (10) Id., p. 36およびp. 37.
- (11) Id., p. 34.
- (12) Id., 「費用の半分は私が, 半分は王室印刷業者 (stampatore regio) Richiniが作る予定…」
- (13) Id., p. 37.
- (14) Id., p. 38.
- (15) Id., p. 38, p. 39, および引用は, p. 40.
- (16) Id., p. 41.
- (17) Id.
- (18) Id., p. 42.
- (19) Id., p. 43.
- (20) Id.
- (21) ミラノのアルカディア運動については, Storia di Milano, Fondazione Treccani degli Alfieri per la Storia di Milano, Vol. VII, L'età delle Riforme, Milano, 1959, Parte VIII, pp. 569-571.

Trivulzio 家の人々の集まる所となり, conte Pertusati (本人) の他 Pozzobonelli 枢機卿, conte Carlo Archinto ら, 恐らく協会のメンバーの父兄らが深く関わっていたようである。

- (22) Corteggio, op. cit., p. 51およびp. 53
- (23) たとえば Sassi について, Argelati は1725年7月25日 (Carteggio, p. 199), 「サッシは一人協会に対し主張し望んでいるローマ金貨年50スクードを強奪しているようには見られたくなくて」という文章がある。他に出所を確認し損ねたが, Argelati が, Sassi にはたっぷり贈り物をしていると記したのを読んだ記憶がある。上の文だけでは, 支払いの有無ははっきりせぬが, 後の紛争の収拾の具合等からも, Sassi には M. や Bianchi 程ではないが謝金が出ていたと考えるべきである。
- (24) Carteggio, op. cit., p. 60.
- (25) Vischi, op. cit., p. 173. Enciclopedia Italiana, Vol. XXXIV pp. 390-391 (Roma 1949). Carducci, op. cit., p. XLII.
- (26) Vischi, op. cit., p. 173. Carducci, op. cit., p. XLII.
- (27) Vischi, p. 173., Carducci, p. XLIII.
- (28) Vischi, p. 174., Carducci, p. XLIII.
- (29) Carducci, p. XLIII.
- (30) Id.
- (31) Id.
- (32) Vischi, op. cit., p. 62.
- (33) Sella-Capra, Il Ducato di Milano dal 1535 al 1796, Torino 1984所収のIl Settecento di Carlo Capra は18世紀当初に I. I difficili inizi の章をあて, その2節 Esaurimento economico e finanziario がこの時代の Milano の疲弊ぶりを証言する。
- (34) Vischi, op. cit., p. 112.
- (35) Lazzarelli はpadre L. と呼ばれているので聖職者だったようだ。階級も M. と同じ司祭長 (proposto) だった。Carducci, p. XLIII.
- (36) Vischi, p. 28, p. 35およびpp. 50-51.
- (37) Id., p. 99.
- (38) Id., p. 101.
- (39) Id., pp. 101-2.
- (40) Epistolario, Vol. V, op. cit., p. 2097.

第四章

- (1) Vischi, p. 57.
- (2) Id., p. 58.
- (3) Id., p. 58.
- (4) Carteggio, op. cit., p. 43.
- (5) Id., p. 59.
- (6) Id.
- (7) たとえばCarteggio, op. cit., p. 64 (1722. 7. 8).
- (8) Vischi, op. cit., pp. 59-62
- (9) Carteggio, op. cit., p. 38.
- (10) Vischi, p. 60.
- (11) Carteggio, p. 286とp. 372.
- (12) Id., p. 107, Vischi, p. 62.
- (13) Vischi, id. e p. 137, Carteggio, p. 427.

- (14) Vischi, p. 62.
- (15) Dizionario Critico della Letteratura Italiana, op. cit., によると, Opera omnia edita et inedita, a cura del Muratori a dell' Argelati の発行年は1732-37で, R. I. S. と平行して進められており, パラティエーナ協会の人々がR. I. S. 刊行の終了を催促した時期と重なっている。
- (16) Vischi, p. 63.
- (17) Epistolario, Vol. VI, Modena 1903, p. 2234.
- (18) Vischi, p. 63.
- (19) Carteggio, op. cit., p. 57.
- (20) Vischi, pp. 63-4. 「前の木曜」とあり日付不明。
- (21) Id., p. 66.
- (22) Id.
- (23) Id., p. 67.
- (24) Id., p. 69.
- (25) Id., p. 75.
- (26) Carteggio, op. cit., p. 170, ecc.
- (27) Vischi, p. 73.
- (28) Epistolario, Vol. V, op. cit. の年表p. XII。
- (30) Vischi, p. 114.
- (31) Id., pp. 117-8.
- (32) Carteggio, op. cit., p. 197. Argelatiは, 次の7月18日付の手紙でも, 「Sassi が Romualdo Salernitano (年代記者) に何かちょっとした愛撫を加えています」とふざけている。Argelati の Sassi に対する反感と軽侮が感じられる。
- (33) Id., p. 200, (1725. 8. 1)。
- (34) Vischi, pp. 120-121.
- (35) Id., pp. 122-123.
- (36) Epistolario, Vol. VI, pp. 2459-60.
- (37) Vischi, pp. 128-129.
- (38) Epistolario, Vol. VI, op. cit., p. 2462.
- (39) Id.
- (40) Vischi, pp. 36-38によるとR. I. S. の事業は Jark という人によって, Argelati という大学者が M. に手稿を供給しているとか, R. I. S. 自体が Carlo Archinto を中心とする事業だなどとライブツィヒ市民に伝えられたとされている。
- (41) 注(38) 参照。
- (42) Id.
- (43) Vischi, p. 140.
- (44) Id.
- (45) Epistolario, Vol. VI, pp. 2465-67 (1725. 8. 22), pp. 2471-73 (8. 28), pp. 3479-80 (9. 6), pp. 2482-83 (9. 19), と1ヶ月以内に4度手紙を書く。
- (46) Id., p. 2481.

終章

- (1) Sella-Capra, op. cit., 所収のCarlo CapraのIl Settecento, Cap. II, 1. L'occupazione franco-sabauda (1733-36), (pp. 241-250) 参照。そこでは占領の結果も検討されている。
- (2) Vischi, p. 148.

- (3) Id., p. 77.
- (4) Id.
- (5) Enciclopedia Italiana, Vol. XXXV, Roma 1949, (p. 301) によると、彼の年俸は appena 100 ducati l'anno だった (p. 301) とされている。
- (6) A. Andreoli, Il ritorno del Muratori da Milano a Modena, in "Nel mondo di L. A. Muratori", 1957, pp. 7-14. ドッビア金貨はドゥカート金貨の2又は2.5倍で、ドゥカートはフィリッポと等価、リラ銀貨の7倍。
- (7) Vischi, p. 149.
- (8) Id., p. 151.
- (9) Id., p. 153.
- (10) Id., p. 154.
- (11) 第四章の注(15)参照。
- (12) Id., p. 160.
- (13) Id., p. 158.
- (14) Id., p. 161.
- (15) Id.
- (16) Id., p. 162.

(1990. 1. 10. 受理)